

ひなぎくの森 第13 文*sawori

「ぼく、フランスに帰ります。」
「え？」学校帰りにエバグリに寄ったフランソワが、突然ひなぎくに言った。
「あ、いえ、1週間だけですけれどね、愛犬のソフィアが死んでしまったのです。お別れをちゃんと言いたくて・・・」
「そうなんだ・・・」ひなぎくはそっとフランソワの肩に手を置いた。
「どんな子？」フランソワはスマホのアルバムからソフィアの写真をひなぎくに見せた。
真っ白でふさふさのピレニーで、とても大きかった。まだ少し幼いフランソワとほぼ一緒の大きさに見える。「かわいい！」
「ソフィアはぼくのお姉さん代わりで、一緒に映画を見たり音楽を聴いたり眠ったり、だから両親が仕事で家にいない時でも寂しくなかったんです。」
「そっか・・・」
「で、フランスに帰りますけど、ひなぎくも一緒に行きませんか？」
「え？」と、ひなぎく。「え？」とこっそり聞いていた松山店長。
「テンちょー！ひなぎくに休みをあげてください！フランスを案内したいのです！」涙目のフランソワに押されて「わ、わかった、わかった、ひなぼん全然有給消化してないかな。今暇な時期だし行っといで。(その代わりに櫛を目一杯シフトに入れてやる・・・)」
「え、まじですか？」そんな簡単に休みくれるなんて店長。私って本当に必要とされているのだろうか・・・イマイチしっくりこないひなぎくだったが、それでもフランス！！憧れのフェニックスのいるヴェルサイユ！！アンナ・カリーナ、ゴダール、ああ、大好きなサガンの「悲しみよ、こんにちは」も読み直さなきゃ！本場のバケットやクロワッサンとカフェオーレ！アニエスb！きゃー！！
「すみません、店長、では遠慮なくお休みいただきます。」心はミーハーにはしゃいでいるが、顔はクールにキメ仕事に戻るひなぎく。
「テンちょーって・・・ひなぎくに甘いですね・・・」
「おいっ！フランソワ！自分が悲しそうにお願いしておいて！強いて言えば、俺は誰にでも甘いんだ。」
誰にでもね・・・もういい、フランスを楽しんでこようじゃないの。

次回、フランソワとひなぎくのフランス、ベルサイユの旅！
物語の中ではどこへでも行けて素敵ですね・・・

つづく

* ひなぎくの森のカルチャーその13 「フランソワズ・サガンと悲しみよ、こんにちは」



フランソワズ・サガン

1935年生まれのフランスの小説家。18才で「悲しみよ、こんにちは」でデビューをした天才！アンニュイな文体はいつまでも読んでいなくなる。田辺聖子の「ジョゼと虎と魚たち」の中でもサガンの小説が登場する。私生活ではかなり波乱万丈で、晩年は寂しく過ごした。天才によくある悲しいエピソードですよ。



サガンの生涯を映画化した「サガンー悲しみよ、こんにちは」。サガン後のシルヴィー・テステューが本物そっくりでした！ファッションもカワイイです♪

「悲しみよ、こんにちは」
サガンの処女作はジーン・セバーグで映画化されています。
冒頭の文章がとても好きです。
「ものうさと甘さが胸から離れないこの見知らぬ感情に、悲しみという重々しくも美しい名前をつけるのを、わたしはためらう。」天才ですよ！



(前回までのあらすじ)

松山店長の元嫁から、再婚のお知らせが届き、元嫁が幸せなことに喜ぶ店長。
ひなぎくは、そんな器の大きい店長に内心惚れ直すのだった。
「ひなぎくの森」のバックナンバーはホームページでご覧になれます→

* sawori *

